

氏名	ビュフ ニコラ アンジュ ジャン イーヴ
ヨミガナ	ビュフ ニコラ アンジュ ジャン イーヴ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第445号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 オルターモダン時代の中で自分のマニエラを作ること の思考 〈作品〉 眠る英雄

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	八谷 和彦
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	伊藤 俊治
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	日比野 克彦
（副査）	原美術館	主任学芸員		青野 和子

（論文内容の要旨）

この論文は、自分の芸術作品や研究を、影響のネットワークで位置づける試みである。より正確に言うと、今回私はニコラ・ブリオー（Nicolas Bourriaud）の『オルターモダン宣言』（Altermodern manifest）、『オルターモダン論』、そして『The Radicant』のエッセイの中から私の作品に適切な3つの主要なテーマを選んで、このテキストを構築した。その3つの概念は：多様性（diversity）、文化的放浪（cultural wandering）、およびコネクション（connections）である。

各章では、それぞれのテーマとの関連性によって選択された私の作品のいくつかを紹介する。私はまた、他の著名な思想家とブリオーのテーマを比較を行う。例えば、ジョルジョ・アガンベンの現代性の概念、エドゥアール・グリッサンのクレオール化の概念、等である。美術史家の思考とも比較する：ダニエル・アラスのマニエリスムについての思考、ユルギス・バルトルシャイティスのアジアと西洋の文化関係、やアンドレ・シャステルのグロテスク装飾の紹介、などである。

オルターモダニティ（altermodernity）とラディカント（radicant）の概念に関する基本的な情報を与えるイントロダクションに続いて、マニエラ（maniera）の概念を選んだ理由について説明する。現在はグローバル化の実験の時代である。もはやポストモダニズムの文脈ではなく、ブリオーが提案しているオルターモダニティという新たな時代に向かっていることを認識する時である。

この新たなモダニティと私の作品の関連性は何か？私はブリオーによって開発されたいくつかのアイデアに大きな関心を持ち、自分の作品を時空レベルで位置づけることを目標とし、その意味を強化する。

最初の部では、多様性の概念（diversity）と、私が歴史の異なる文化や時代のミックスに強い興味を持っていることについて述べる。エキゾティズムを介して、または単に東洋と西洋がお互いに様々な影響を与えあったことを認め、私の作品で多様性とクレオール化が重要性を持っていることを再確認する。ニコラ・ブリオーによると、クロード・レヴィ=ストロースは、彼のエッセイで単一文化の危険性を強調し、又ビクター・セガレンは多様性の審美（美学）の重要性を説明している。又、エドゥアール・グリッサンのクレオール化（creolization）やポップ・カルチャーへの関心を記した後、私の作品でどのように文化のミックスが行われているかについて述べる。

第二部は、時間と空間を介して、旅への関心、文化的な放浪の概念の重要性について説明をおこなう。また、不安定さの概念を介して自分の作品の中の儚さと虚栄心について話す。いくつかの類似点がブリオーの

「一時的な分岐」(temporal bifurcations) とアガンベンの「同時代」(contemporary) の間で確立されている。決してノスタルジックな態度ではない「同時代性」(contemporariness) のキー概念の一つは、時間と空間の異なる時代の対立との出会い、また自分の時代に存在する遅延(ディレイ)にある。

第三部は、記号のネットワークの中の接続と変位(displacement)の考え方についてである。その後、グロテスク模様の構造について考察し、インターフォーム(interform)として芸術作品の概念とアプロプリエーション(appropriation)の概念について述べる。そして20世紀の思想家やルネサンスの芸術家たちによって強調されたように、ミックスの重要性について話す。それは、ゲームとしてのグロテスクの作り方や、考え方としてのマニエリスムを重要にしている私の作品の世界にエコーを生成する。

結論としては、歴史と遊ぶ愉楽について述べ、私のマニエラ(maniera)の可能な進化について自分自身を問う。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文はニコラ・ブリオーの「オルターモダン宣言」を筆頭とする“現在“を巡る言説群の中に、自らの作品や研究を位置づけようとするものである。

特に強調されるのは、ブリオーの「オルターモダン宣言」で繰り返えされた新たなモダニティの質である。コミュニケーションの回路が多層化し、移動や回遊の機会が急増し、そうした流れが人間の生き方や経験に大きな影響を与え、日常そのものが流動と混沌の場に変わっている。常に何かが混ざりあい、変換され、記号に溢れた風景を絶えず潜り抜けてゆかなければならない。アーティストはそうした世界を横断し、複数の表現やコミュニケーションの間に様々な経路をつくりだしてゆく存在である。こうした世界をブリオーはポストモダンの終わりとオルターモダンの始まりとみなす。

本論文はそのような世界観や生き方の根本的な変化を背景に、“旅する人“としてのアーティストの特性を、「多様性」、「文化的放浪」、「関係性」と3つあげ、それぞれのテーマに自らの作品を繋げ、論じようとする。

まずモノカルチャー(単一文化)ではなく、異なる文化や異なる時代を“共与の精神“のもとに融合させることで生まれる多様性とクレオール化がこのオルターモダン時代の要となってゆくこと(第一章)、時代と空間を旅するように移動する文化的放浪の概念がある種の脆弱性や不安定性をこの時代のアートにもたらしめていること(第二章)、溢れる記号のネットワークの中での関係性、つまりコネクション(接続)とディスプレイメント(転移)がグロテスクさとキッチュさをこの時代のアートに混入させていること(第三章)などが順を追って論じられてゆく。

このような論考をベースに、自己のマニエラをいかにして生み出してゆくことができるのかを自らに問いかけるのが終章である。その結びの部分には、歴史と遊ぶことのヴィジョンや“楽しい知識“に基づくイメージの展開への希求が綴られている。

論述は多岐に渡り、多様な言葉が噴出し、それぞれの文章も有機的に結びつけられているとは言い難いが、自らの作品の未来の展開を踏まえながら、新しい時代の荒波に立ち向かってゆく気概は認めたい。以上の理由により合格と判断する。

(作品審査結果の要旨)

ニコラ・ビュフは図像を描く。図像を描く行為には当然それなりの理由がそこにはある。集団の中において、自分以外の他者に自分の意思を伝えるためにある伝達手段として言語が最も活用されているのだが、図像によってこそ伝わる種類のものがある。言語が異なる同士のコミュニケーションであったり、言語が十分に発達していない者への伝達手段であったり、瞬時にして伝達したい場合の手段であったり。ニコラ・ビュ

フの作品の出現している図像は、空間の中に配置されており、鑑賞者を包み込む効果を出している。鑑賞者の身体を支える足下にある床であったり、手に取ることが出来る立体物の表面であったりする。その空間に立ち入った鑑賞者は図像によるメッセージを一気に受け取ることが出来る図像伝達装置となっている。フランス国籍であるニコラは言語を超えたコミュニケーション手段としてキャラクターの図像を多く使用している。それが彼の言語として捉えられるのではないかと推測ができるのは、漢字という図像からきている文字を文化に持つ私たち日本人にとっては容易である。文字を書く勢いでドローイングの手法で描かれているその図像の固まりは物を語るテキストのようにも見える。曼荼羅の世界観にもあるように見るひとによって様々な物語として解釈することが出来るであろう。このひろがり言語以上のものであり、またニコラ・ビュフが描く線のタッチがどことなく日本人らしからぬ線（ここは非常に言葉では説明しにくいところではあるが、とくに曲線のライン、筆圧などにその印象を受ける）が醸し出す異文化という匂いが一層、ここではないどこかへ誘ってくれる呪文の伝達手段になっている。今後もこの図像を書き続けていくなかにおいて、大量の図像を構成するひとつひとつの図像の中にあるパーツにも細かくキャラクターとして捉えて、より密度ある空間を創造していってほしい。

以上の審査結果をもって、博士学位授与に値すると判断した。

(総合審査結果の要旨)

ニコラ・ビュフはフランス パリに生まれ、パリ国立高等美術学校（エコール・デ・ボザール）修了後、国費留学生として東京藝術大学

先端芸術表現専攻に入学、修了後、後期博士課程に進学した。彼はすでに東京都現代美術館や旧フランス大使館、メゾン・エルメス等の展覧会で作品を発表しており、またフランスや米国などでも数回個展を行うなど注目を集めている。彼の仕事のうち、特記すべきこととして、2012年のパリ・シャトレ座のオペラ「騎士ローランド」のビジュアルデザインが挙げられる。このとき彼は舞台美術や衣装等のビジュアルデザインを全て担当し、この仕事でフランス演劇・音楽・ダンス評論家会において2011-12年シーズンのビジュアルデザインの最優秀賞を受賞している。

上記のように彼は精力的に活動を行っている、新進気鋭のアーティストであるが、彼の作品の表現スタイルは、子供時代にフランスで見た日本のアニメや特撮、任天堂やタイトーなどのビデオゲーム、アメリカのカトゥーンアニメーションなど様々な20世紀後半のポップカルチャーの影響下にあり、また、少ない色数、意図的に壊れやすい仮設的な素材を使うところに特色がある。

今回の論文「オルターモダン時代の中で自分のマニエラを作ることの思考」の中で彼は、ニコラ・ブリオーの「オルターモダン宣言」「オルターモダン論」を基調とし、ポストモダン以降の新しいアーティストの存在のあり方を思考し、ブリオーの述べる「ダイバーシティ」「文化的放浪」「コネクション」について自作との関係を定義し、またその発展について論考を行っている。

展示作品「眠る英雄」は、15世紀末に書かれた物語『ヒュプネロトマキア・ポリフィリ』（ポリフィルス狂恋夢、Hypnerotomachia Poliphili）を題材とし、それに現代的な彼独自の解釈と再構成を行い、作品化したものである。これは、2014年4月から開催される、原美術館（品川）での彼の個展に出品される作品であり、主人公が冒険でめぐる様々な場所をロールプレイングゲームを連想させるような形式で観客に提示する、その展示構成要素の一部でもある。15世紀のイタリアの物語と任天堂のゲーム的世界を統合し、再構成して現代に生きる我々の眼前に提示する、その手腕は独自性も高く、作風としても完成している。以上の理由により学位授与に値すると考え、合格と判断する。